

Title	ケマル・カルパトとオスマン研究
Sub Title	The opinion of Kemal H. Karpat about Ottoman history
Author	三橋, 富治男(Mitsuhashi, Fujio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1981
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.51, No.1/2 (1981. 6) ,p.1- 20
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19810600-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ケマル・カルパトとオスマン研究

三橋 富治 男

は し が き

茲に縷述しようとするケマル・カルパト教授の研究領域は本来、歴史学というよりは社会学系統の分野である。嘗つてイスタンブル大学、ワシントン大学、ニューヨーク大学などに学び、トルコ共和国では、首都アンカラ所在の「中東工科大学、イスタンブルでは「ボアズイチ大学」〔旧ロバート・カレッジ〕その他で教壇に立ち、現在ではアメリカのウイスコンシン大学の教授としての経歴をもつ碩学である。主要なる著書としては一九五九年に「トルコの政治、多数政党への移行」一九六〇年に「トルコ農村に於ける農場近代化の社会的影響」、一九六八年に「現代中東に於ける社会及び政治思想」、一九七二年に「オスマン国家の変容」、一九七三年に「オスマン国家に於ける民族主義の社会的基盤に関する考察」又、同年には「トルコに於ける社会変化と政治」その他の労作がある。

とりわけ、一九七四年刊行の *Social Economic and political studies of the Middle East. vol. XI.*

「The Ottoman state and its place on World History」Brill, Leiden はオスマン研究に関して現在世界の指導的立場にある屈指の碩学の史学論集であるが、この論集に収録される巻頭序説 (p. 1-13) と同書掲載の「The Stage of Ottoman History, A Structural Comparative Approach」(p. 79-97) とはカルパト教授のオスマン史の捉え方、理解の仕方、その展望といったものを端的に示している。前者の縷述内容は後者の結論に集約される基本理念と相関々係に

於て展開されているので順序としてこの基本理念に就ての陳述から一瞥しよう。

「トルコ共和国、ユーゴスラビア、アメリカの研究者達による文献資料に基く最近の著述は新概念の展開を支持する可成りの分量のデータを生み出している。しかも間接的乍ら最近までトルコのオスマン研究をリードしていた民族主義的立場に立つ者の見解が的確でないことを浮き彫りにしている。土地保有権の在り方、ティモール制、徴税方式、人口と住居の問題、或いは又通商や農業、財政面での立法措置ないし社会集団等々の論題に関する新研究は、オスマン史上の諸々の人物に対し又文化面に対して加わる経済的・社会的諸要因の影響といったものを強調してやまない。斯くして新研究は「生成」「拡大」「停滞」「凋落」といった各時代にオスマン史を区分せんとする陳腐にして隋性的とでもいべき旧来の区分方式にとって代って、経済的な又社会的なもろの力の衝撃といったものを認め、オスマンの社会変革のなかで文化的な諸要因に正当な位置付けを与えんとする新区分に置き代えらるべき可能性が出て来ている。

この研究のめざすところは、土地制度と土地管理を通して政府及び社会に絶大な権利を行使したる社会集団の変化〔浮沈〕に基きオスマン史を発展と進化の「時期」「段階」乃至「様相」に区分することにある。

かくしてオスマン史の時代区分なるものは基本的なる経済的資源——土地——の組織と土地の保有権と土地運用とに役割の基盤を置くエリートたちの浮沈と本質的にかゝるものである。(ibid. 79-80 参照)

と述べてこの基本的見解に基いて、

「オスマン史に於て発展と変化の諸段階が存在していることは社会変容の理論すなわち一つの段階から次の段階への社会移行には「激動」云い換えれば重かつ大なる社会転位の力を伴うものであるといったテオリーに照らして明かとなる^(註)。この理論はオスマン史の場合にも適用できるものである。

〔例えば〕一四〇二—二二一年、一五九六—一六〇三年、一七八九—一八〇八年といった年代がオスマン研究では説明が

つかず放置された儘の状態になっていることに注目したい。

そうした年代は宛も旧段階から新段階への移行期に相当するオスマン国家にとっては「激動」ないし不安動揺の時期であった。これらの時代は又指導的な社会グループの勃興、他方では没落の分水界であった」(ibid. p. 97 参照)

と述べている。この提示との関連に於て特に引用したいのは、オランダ・ヘーグ所在の社会科学研究所 (Institute of Social Studies The Hague) のオスマニストで、カルパトのこのテーゼに対してコメントを付けるファン・ニウエンヒトイゼ (C. A. O. Van Nieuwenhijze) の論評である。

彼は或る論題に対して、歴史学と社会学とは一たびは競合するやも知れない、だが稀ではあるが、相互錬磨の機会を得て歩み寄り恐らく結果に於て結論をより妥当なものにするかの如くに思われると前置きしながら、

「……簡単に云い切ってはいるが、内容は激しいものである。「カルパト」教授はオスマン乃至トルコ事情に就ての研究者達が全般に通じる理論を持ち合せていないことは紛れもないと考える。オスマン史の全行程を包括することなしにただ改革とか変革とかの段階に区分して考察するのが常であるとする。オスマン史が連続的な社会・経済・文化・政治の歴史であるとのカルパトの注意喚起もひとしく重要である」

と述べていることを併記・指摘して置き度い。

(註) カルパトは所謂 Social Dynamics の理論を重視する如き見解を示している。この理論に関しては Colorado 大学の Prof. Kenneth, F. Boulding の著述があることを附記したい。

以下現代トルコの生んだ社会学のエキスパートが上述の如き自己の思考方式と価値感に裏付けられて長期永続性を持つ影響力の大きい超大国家としてのオスマンに世界史の中での正当な位置づけを与えんとするアプローチのいわば骨子に当る部分を訳述して参考に供することは史学の面であながち無益ではあるまい。カルパトは次の書き出しでやゝ長い、内容広汎多岐に亘る論述を展開して行く。〔同書 p. 1-13 参照〕

(一)

「云うなればオスマン史は歴史研究上の継子である。世界史に関する多くの著述、しかもヨーロッパ・アジアを取扱う著述の多くはオスマン史を無視し続け、乃至は取上げたとしても時折短かい章句ないし、ほんのなごりの指摘に留まるものでしかなかった。一方また、ハンマー・プルグシュタール、J・W・ツインカイゼン、N・ヨルガの如き、十九世紀二十世紀初期に記述されたオスマン史に関する基礎的著述。又オスマンの諸記録や、宮廷史、ビザンツの著述を駆使した有益な報告があるにはあるが、学問的な現代の基準、方法論、概念構成の不自然さなどから眺めると既に時代離れがしている。H・A・ギボンスの一九一六年刊行『オスマン帝国の創建』は、著述と理解に就ての新時代がオスマン史研究の上にも到来したものととして少数のオスマニスト・グループの間に満足の反響をもたらした。但しそうした予見と期待とは依然として果されずに居る。概してオスマン史はトルコに於ても諸外国に於ても未だ伝統的ともいふべき叙述方式で陳述がなされており、テーマに就てのより一層客観的な処理の仕方ばかりでなく、オスマン・システムの社会・経済・又有機体的な特質を生み出す概念的な枠組をも大抵拒んでいる。

オスマン・トルコ史に於けるこのなごりを正当なものとして理由づけることは困難である。というのは抑々原初より終末に至るまでオスマン国家は、社会的・経済的・政治的な組織について独自の様式を發展させ、しかも欧州の歴史と緊密な関係のもとに展開をみせたからである。事実、オスマン史は中欧と西欧に於ける諸々の事件の推移から影響を受けたし、又一方ではそうした推移に対して影響を与えた。反面ではオスマン国家自体の隆昌と衰凋とは欧州史の進路を規制する同一の経済的な又社会的な力によって大きく左右されたのである。

オスマンの支配が東南欧・中東及び北阿の諸社会に變貌を与えて永く痕跡を留めている反面、その支配下に置いた人種的・言語的・宗教的グループに対して一体性の保持と永續性とを与えたとする見解に対して反論する歴史家や社会学

者は恐らく見当るまい。オスマン国家は世界に於ける三大一神教すなわちイスラム教・キリスト教・ユダヤ教のすべてに対して公認を与えたる中・近世に於ける唯一の政治機構であつたし、又人種的・言語的細分と併せてそれらの調和的な共有をも保証したのである。嘗ってオスマンの支配下に帰した人種、言語グループの数は前後を合せると六十種を上廻るとされている。歌・亜・阿に於て現存する諸国家や連邦共和国などの約三十八のものは、全体と部分たるを問わず、一時期或いは嘗ってオスマン支配下に包括されていた。このようにオスマンの歴史は、バルカン及び中東に於ける数多くの現代国家の歴史にとつても不可欠の重要部分である。このように自己の政治勢力を三大陸に拡大するにつれて漸増的に異質分子を包括したものの、内部結合のために備うべき諸原則の多くを持ち合せなかつたこの国家を六世紀以上（一二九九—一九一八年）にわたり支配するためにオスマン政府が採用して来た方法については妥当に探究されていないし、又いまだに充分に説明し尽されてもいない。嘗ってオスマン支配下にあり、ついに国家の地位を取り戻した人種・言語グループの国民たちが、しばしば提示するオスマンの組織なり政府の在り方に関して現存する諸理論の多くは最近の諸研究によっては最早支持されない。それというのも、それらの諸理論は非民族的な（単一民族構成でない）オスマン国家に生起した諸事象を説明するのに、民族的立場に立つての歴史観を適用するといった、抑々の初めからつきまとっている本質的な矛盾のために損われているからである。このようにしてオスマン国家とはビザンツの模写再現であると主張するヘレニストたちの古色蒼然たる議論とか、或いは又オスマン支配層はスラヴ系改宗者の血縁者たち〔訳者註—具体的にはデウシルメ文武官僚群を指す〕によつて構成されているといった若干のスラヴ系学者の論述、さらに又多くの民族優越感に基く理論なるものは一方的であり、かつ又不完全なものであることが立証されている。さらに、もつと最近の若干の研究によればオスマン国家が永続的生命を克ち得た所以のものは、被支配階層の職業とか個人の適性ととか、宗教面や、社会公共面での諸関係を正當に配慮して政府自体の諸機能を規制した特殊の内部機構に負うところが多いことを示唆している。このような複合種族的・複合宗教的な性格をもつオスマン国家は、社会的な、又種族的な均衡

のもとに内部結束を固めたものであり、国家の持続性は国家及び政府レベルでの民族的イデオロギーの欠除ということ
で反って増進されたものである。だが結局のところ、新しい社会・経済・政治的な諸勢力が既存の社会公共的な、又宗
教的な体制に挑戦し、種族的ナショナリズム、換言すれば古典的なオスマン国家の基盤を構成する、おのずから均衡の
とれた多民族、多宗教的な組織に対して全く正反対の国家組織の原則が生まれ出る素地を用意したのである。この挑戦
に対抗できない国家は夙に自己変革をとげようとする試みした後〔訳者註―セルム三世のニザム・ジェディト、マフムト
二世の諸改革、さらにはタンズイマート、メルシュルテイエトなど一連の動きを示す〕、ムスリム国家に〔訳者註―アブドゥル・ハミ
ト二世の汎イスラミズムを指す〕次いでトルコ民族国家を志向し〔訳者註―別著「The Transformation of Ottoman State,
1789-1908」で一九〇八年以後トルコが世俗的民族主義を打ち出したことは汎イスラミズムの構想をくつがえしアラブ分離主義を促進し
たと述べる。〔International Journal of Middle East Studies〕3 (July 1972) 参照〕次第に分解の一途を辿ったのである〕
と述べてカルパトはオスマン国家の分解作用の重要々因について一応触れる。次いで転じてオスマン史に対する欧州史家
の、いわば不当ともいうべき無視の態度が深く根をおろし長期にわたり続いて来た要因に就いて以下の如く誌す。

「オスマン史がかようにネグレクトされて来た理由は外でもない。オスマン国家と欧州諸国間に展開された変転極りな
い政治関係とか、トルコ人に関して西方世界での悪化しつつあるイメージとか、最終的にはオスマン支配に反対する抗
争を通しての民族主義の擡頭や、独立諸国家の出現などの動きにかゝわり合いを持っている。

これらの独立国家がオスマン史に関していさゝかの関心を持ち合わせなかったことは云はずと知れたことである。斯
くオスマン史をネグレクトするに至るこのような諸要因については一つ一つを手短かに取り上げることが必要である。
一四五三年のコンスタンティノープル（イスタンブル）の攻略と、それに引続いてトルコが西方を攻撃してキリスト教

社会を破壊するであろうといった、結果として起る恐怖の念はトルコに関する西方のイメージ形成を条件づける最も強力な刺激剤となった。ロバート・シヴォベルが指摘するように、ヨーロッパ人はオスマン人によって提示された問題を理解するためにイスラム及びレバント〔訳者註―東地中海沿岸諸地域〕を取扱う中世の文書集成に倚りかゝり過ぎ、しかも中世の反モスレムのな、又、十字軍関係の文献に於て展開された思考・表現方式におびたゞしい分量の新知識をあてはめたのである。さらにシウォベルの言葉を採用すれば、ルネサンス期の人士が歴史及び社会に関する人文主義的な見解を發展させようと努力しつゝあつた宛もその時期に於て、…しかも又創造的な、合理的な人間を育成すべき新時代の先導として真の詩や、往昔の英知の復活を謳歌していた…まさにその矢先に於てコンスタンティノープルの陥落が行なわれたのである。まさしくオスマン・トルコの成功は人文主義者たちの抱いていた自信と樂觀とを打ちくだいてしまったとする結論が如何にも合理的らしく見えるのである。だが十六世紀には恐怖の念から畏敬と称讃に〔訳者註―カヌーニ・スレイマン時代を指す。一例としてビュズベックの陳述資料〕、又十七―八世紀〔訳者註―停滞から衰勢に向う時期に當る〕には無関心といった、トルコ人に対する欧州側でのイメージの変化は、ノーマン・ダニエルによって周到に取扱われており、この上、さらに掘り下げるまでもない。現代に於てさえトルコ人及びオスマン国家に関する欧州側のイメージなるものは、嘗つて十字軍を正当化するために利用されたそれと同一の中世的概念によって育成されたものであり、とゞのつまり経済的、文化的帝国主義の時代に於ても、それが引続き調法がられていることを指摘すれば充分である。とは云うものの一方、後期十八世紀及び十九世紀に、オスマン領内での出来事の詳細に詳細な知識を持つ人士によって行われた欧州の諸研究の若干のものは、より一層現実的で、実際の目標に迫つたものであつた。(例えば)ドーソン(ムラジャ)、エンゲルハルト、ウビジニ、ウルクハルトその他、欧州諸政府のためにしばしば活躍した多くの人士は、この時期に、主として通商・経済・行政管理及び政治的变化など具体的な諸問題に没頭した。或る者は、欧州の領土的、経済的な利害の枠組みの中でオスマン問題を評価しそれに応じて改革主義者の程度をおしはかつたのである。ウイリアム・ランガ

「訳者註―ハーバード大学教授」が述べる如く、彼らはしばしばオスマン国家に於ける近代化の足取りに対し辛抱しきれない焦慮を感じ即座に顕著な変化が生ずることを期待し、オスマン人が直面した数多くの困難が、他の殆どの国々が直面した困難よりも一層大きなものであったという事実を無視して否定的な判断をくだし勝ちであった。ところで後期十九世紀及び初期二十世紀に於けるオスマン国家に対しての欧州著述家の態度は、近東問題、即ちオスマン国家の不可避的な没落と領土分割、さらには中東に於ける新しい勢力分野の決定などの予想によって惹起される複雑な諸問題に深く影響されていた。

審判がくだる時期と考えたオスマン社会に対して客観的な研究を企てることを到底欧州学者に期待できなかった。欧人のオスマン人に対する否定的な見解は主として十九世紀にはじまるが、バルカン次いで中東から寄稿される民族主義者たちの歴史的文献によってさらに増幅された。これらの新興独立国に於ける歴史家たちは殆んど一致して民族的なアプローチの仕方を採用し、オスマン国家なるものは自己の民族国家が、その中から生まれ出た母組織としてではなく、自分たちの中世国家が近代政治機構に自然進化するのを恐らく妨げた異質勢力として眺めたのである。オスマン支配とは民族的欲求不満、社会的不公平、経済的後進性などについて、さらに又国家目標や抱負達成の上での失敗について全責任を負わせる便利きわまる「贖罪の山羊」に外ならなかったのである。

なおオスマン国家の正当相続者であるべき筈のトルコ（共和国）に於てすら、故ファト・キョプリユ教授が卓越せる研究と個人的努力を通してオスマン的な遺産に対して尊敬の場を与えようと努力したにも拘らずオスマン人をよくは取扱わなかった。

共和体制はオスマンという過去について歴史的にも文化的にも自己と同一であることを認めることなしに青年層を教育すべく一九二三年以後格別の努力を傾倒した。かくて、現代的なもの、トルコのなもの、民族気質に関する若い世代の見解なるものはオスマンにかゝわりのある殆んどあらゆる事物への拒否ときびしい批判に根差すものであった。まさし

く、「オスマンル」という表現は新しい世代の言葉では宛も十九世紀にオスマン国家崩壊（弱体化）の様相を目のあたりにした欧州人の間で流行したかのアラ・テュルカ（トルコ風）」という表現と同じほど輕蔑に値し卑下すべき用語であった：」

としてトルコ人自身が歴史上「超大帝國」として嘗て示した組織的力量、建設的能力の忘却を意味する「自信喪失」、「自己蔑視」について触れる。但しこの点については、次の如く立ち直りの転機が漸て訪れたと附言する。

(二)

第一次世界大戦、そしてオスマン国家の最後の崩壊とは、現実政治の領域からそうした蔑視の念を取り除き、いつとはなしに歴史に就いてもっと客観的な評価をくだすための素地を準備した。なお、一九二二年に於けるスルタン制の廃止と、一九二四年に於けるカリフ制の廃止とは、それ／＼オスマン、ムスリム社会を欧州から距てゝいた諸制度のいくつかを取りのぞいた。しかも、このことは西欧を模範に国民国家を發展させようとする共和国の努力によって明示されたように西方優位を象徴的に承認したものであった。それ故に共和国宣言以来書かれたオスマン国家に関する欧州の著述の多くは新しいレジームの努力を賞讃し、いとも、あざやかに旧オスマン時代に風霏した暗い隋性や伝統主義と対比したのである。予想されたようにオスマン国家に対する真に重要な研究は主として一九二三年以後、とりわけ第二次世界大戦以後行なわれた。若干の碩学の名を挙げるならば、フランツ・バビンガ（しばしば主観的な判断がみられるが）、ポール・ウィティク、バーナード・ルイス、アーノルド・トインビー、クロード・カーエン、ロベール・マントラン、ギブ・パウエン教授たちは一連の卓越した著述のうちで、オスマン文明の本質をみとめ、イスラム史に於ける、また中東史に於ける極めて重要な位置を強調し、かつ又この地域に関する新たな関心をよび起したのである。さらに又、第二次世界大戦以後トルコでも、またバルカンでもオスマン国家に関する見解に徐々ではあるが変化がみられた。トルコ

〔共和国〕に於ては、初期に見受けられたオスマン人への絶対的な拒否反応は、急進グループ・保守グループの双方に於て徐々ではあるが漸次過去に対する思いやりのある温い肯定に置き代えられた。急進グループは、現代トルコの経済的な、又社会的な短所とは、推測ながら、元来が後進的なうえに、さらにその上、西欧帝国主義によって収奪されたオスマン社会秩序の弁証法的帰結として説明しようとする。急進グループは欧州側に責任を負わせて或る程度までオスマン人の名誉を回復し、間接的に自分たちの過去と和解した。一方また保守派の方では、現代トルコの文化とその価値の基礎をムスリム文化とオスマン政治の背景のうちに見出した。より公正な方法で、又学問の高い水準の業績の中で、自国の歴史を眺めうる学究者という新しい世代の出現はトルコ〔共和国〕に於けるオスマン研究に対しての現在の人気に又寄与している。……〔ついでカルパトは嘗て旧オスマン支配下にあった諸地域でのオスマン研究態度に関して論評し〕……

第二次大戦後におけるバルカンの歴史家たちも又政治上の必要性に迫られて、マルクス主義者の歴史決定論の枠組みのなかで自己の国家の民族史を説明しようと試み、オスマン時代を以て、十九世紀に於けるプチ・ブルジョア及び資本主義、そして二十世紀に於ける社会主義へとそれ〴〵の社会移行に先行する「封建時代」として規定したのである。若干の無理なマルクス主義的解釈があるにも拘らず、第二次世界大戦以後に於けるバルカンの修史では、オスマン国家の社会的・経済的な構造に新しい光をあてる貴重な、しかも可成りのデータを創り出している。だが不幸にしてオスマン史の一層真実に迫る研究面でのこの傾向は、今やマルクス主義的な用語で、うわべをくるんだ民族主義者のアプローチに取って代られたかに見え、それは第二次世界大戦以前に流布していたアプローチの仕方よりもっと敵意に充ちたものとなりそうである。〔転じて〕オスマン史に対するアラブ側のアプローチの仕方にも又、バルカンに於ける修史のパターンに酷似している。とりわけ一九三九―四五年〔第二次世界大戦中〕及び一九五二―六七年に於けるトルコとアラブ間の外交諸関係の変動に基き反トルコの激動の中で常住揺れ動いたのである。だが最近ではザイネ・エス・ザイネ〔訳者

of the Ottoman Turks 1854. 復刊に序文を寄せている」の如きアラビア語を駆使する若干の学者たちが、より一層客観的な態度でオスマン史を眺め、アラブ文化やアラブ社会に対してのオスマンの政治的な寄与について再評価しようと真剣な努力を傾倒している。

オスマン史に関するイスラエル人の諸研究に就ては故ウリエル・ヘイド〔訳者註—トルコ民族主義や言語改革に就てのイスエルの研究者、代表的著作として *Foundation of Turkish Nationalism*, London 1950 がある〕によって樹立された高い水準に迫るものは比較的僅少とはいえ、その諸研究は極めて優れたものでありかつ又客観性をも持っている。だが第二次世界大戦以後のこうした凡ての努力や業績は貴重とはいえ、オスマン史に関する限り西欧その他の地域に於ける、より大きな研究者グループの認知や容認を得るまでには至っていない。現今、オスマン諸研究は依然として一握りのトルコロジストやオリエンタリスト達の少数グループに局限されており、しかも多くの学者者たちは自己の無智からオスマン史を、限定された意味合いであるが「秘教的な分野」と見做している。……明らかに見方としてオスマン史が史学全般からすれば限定された関連性しか持ち合わせないことを示唆している。……歴史の足どりが大きかったにも拘らず又、欧州・中東及び北阿の歴史に本質的に関連性を持つことは素よりのこと、又非西欧社会の社会的・経済的な変容の解明にも大きな貢献をしている事実にも拘らずオスマン史研究は依然として最もおろそかにされ又、ないがしろにされた分野の一つである」

ことを強調し世界史全般の解明の一つの鍵として国際的な協力によるオスマン国家の見直しを強調してやまない。

(三)

「オスマンの歴史・社会およびその文明については、新たななる、しかも又ますます増幅された関心と、一層集中的な研究が要請される一連のやむにやまれぬ理由が存在する。さらにオスマン国家は最早、国際政治の場に於て何ら主導的な立

場にもなく又領土的な紛争に捲き込まれる心配もないのでその研究は党派的な反論や現実的な動機に捉われることなく比較的自由に行われることが期待できるのである。オスマン諸研究のために弁じて置き度い第一の、しかも基本的な事由は欧州の歴史及び社会に対してのオスマン国家の緊密な関係である。十五―六世紀に於ける欧州の大きな社会的・経済的な変動なるものは、オスマン側の土地保有組織、都市化の高い比率、農産物の生産増加と拡大された市場取引、ギルドの発達、それに中東及び地中海水域と欧州との交易に見られる変化を含めて国内的・国際的な通商面でそれに対応しての変化と相互に絡み合っている。十六世紀に於ては、この展望のなかで取り上げるには余りにも複雑な諸々の要因のために暫時通商が停滞したとはいえ、西方との交易関係の維持はオスマンの対外関係に於て枢要な事柄であった。そうした事情があったとはいえヴェネツィア人、ジェノア人、次いでオランダ人、イギリス人、フランス人などの海上貿易、さらに北歐に延びる陸上ルートは、オスマン人に対して国家の存続中、西方との交通連絡の維持を可能ならしめたのである。又オスマン人は、インド洋、西アジア、アフリカ周辺の諸邦とも通商関係を持っていた。このような通商関係は、オスマン所領と欧州との間のみならず全体として亜・阿・欧間の社会的・文化的な相互作用を容易ならしめるものであった。オスマン国家は通商に対して新しい機会を開いた。このことは中東に於いて十字軍の脅威を終熄せしめるものであった。かくして嘗ってヴェネツィアによって経済的に支配されたビザンティムの場合に見られる如き従属関係に基くものではなく対等に二つの地域〔亜・欧〕の間に新しい、しかも、より幅の広いパターンの通商を営むための諸条件を創り出したのである。

まさしく、多民族構成のオスマン社会は、一部分は保護税率関税、さらにはムスリム・非ムスリムによって構成される大量の、しかも進取的な土着の商人や職人より成る中産階層の勃興に基き十五世紀後半に於て繁栄し始めた。トルコの物資は、北歐・中欧の市場で売りさばかれる一方、あらゆる信条と言語を持つオスマン商人たちは、アンコナ〔北イタリア〕、ウィーン、及びその他の諸都市に商品取引の場を設け、しかもさまざまの通商取引に従事し、自分達だけの信

用取引さえも發達させたのである。

政治的にオスマン国家は欧州の同盟国〔訳者註―例えばバロア・オルレアン朝治下のフランス〕の国力を支えるために〔重厚な〕經濟力を利用した。カピトウレーションすなわち一五三六年乃至一五六九年にフランスに、次いでオランダ、イギリスに許与した通商特権なるものは、一方ではローマ教皇に対抗し他方ではオーストリア〔神聖ローマ帝国〕のハプスブルク王朝に対抗するために計画立案されたものであった。十六世紀に於ける国民国家としてのフランスの勃興はオスマン国家との同盟によって大いに促進されたものである。西地中海に於けるオスマン艦隊〔訳者註―ハイレッツディン・バルバロスの艦隊〕の出動はフランス南部の脇腹部分を頸敵の攻撃から守り、フランス君主をして北方に勢力を結集させ、斯くしてフランスの国民国家の国境線を確保せしめたのである。

オスマン政府は又、欧州のプロテスタントに対する支持政策を打ち出した。南部ハンガリアに於いて、又トランシルヴァニアに於てさえ云えることだが、カルバン派の成功は、そうしたオスマンの政策の直接の成果であった。〔勃興期〕プロテスタントに対してのオスマン側の支持を研究する諸学者は、このような政策は専ら〔オスマン側の〕国策に基いて立案されたものとの結論を下している。それらの学者達の見るところでは、オスマン側の動機なるものは、そうした政治的努力のもたらす確乎たる又永続性を伴う結果を譬え度外視しても差支えない程もっと重大なモラルの面での理由が存在したと見做されている。プロテスタントに対して与えられた支持は、オスマン人とプロテスタントとの間で文書の交換という事態を伴ったが、それらの文書で他の事柄にまじってオスマン人はプロテスタントとイスラミズムとの近似性を論じている。だが、このような東方対西方との間の文化的・哲学的理念の交換という事態に関しては、少くとも得らるべき筈の同意をとりつけることが出来なかつた。一五七二年〔八月二十四日〕、聖バーソルミュー〔サン・バテルミ〕の大祭日に於けるユグノー〔フランス新教徒〕の大虐殺という事件によって惹き起されたイスタンブルの深刻な驚き振りがはっきりと示したようにオスマン人は欧州の宗教的・文化的な動きに敏感に反応したのである。ユグノーはオス

マン政府の支持を取りつけていた。(なお前身カトリック教徒でオスマンに奉仕する者の数は多かつた)。

ところで欧州のプロテスタンティズムに対するオスマン側の政策に関しての妥当な研究は先ず第一に、トルコ側からの援助なるものが、欧州文化史の全行程に対して果してどのように作用したかという事実、第二にはそうした援助が総じて、宗教上の異議申し立て、特にキリスト教信仰上のそれに対して新たな理解をオスマン人にもたらしたかどうかという事情についての確認に向けらるべきである。十六世紀の初頭オスマン政府自身が正統派ムスリムを代表して、中央権力ならびにそれを支える社会秩序に反対して反乱を起した異端派のクズル・バシ即ちアレヴィ〔訳者註―反オルソドクス・イスラム教義を信奉する反体制派、社会運動の展開者、オスマン史上、この運動を以って社会構成上の変化に伴う政治・文化的な再調整の動きと見るべきか。或いは又単なる反オルソドクスの宗教活動としてのみ受けとめるべきか、多くの学究は後者の見解をとる〕と東部アナトリアに於いて抗争に明け暮れていた丁度その時期に当るだけに、この指摘は特に重大である……〕として思想文化相互交流に対するこの面での史的な考案を要望する。

(四)

カルパト教授は、転じて中欧史なるものが如何にオスマン国家の歴史と緊密にからみ合い密接不可分であるかという事実に関点を向けて次の如く論及する。

「……中央ヨーロッパ、特に十六世紀から発展がはじまるハプスブルク王朝支配の歴史は、その一方を無視しては他方の研究が不可能となる程にオスマン王朝と極めて密接にからみ合っている。十八世紀に於けるトランシルヴァニア、バナート、北セルビア、さらに後にボスニアに於てハプスブルク王朝が直面した社会的・政治的な諸問題とは、実にそれ以前に於てオスマン朝がつくり上げた比較的階級性のない社会秩序に対してオーストリア側が強引に押しつけた変化の結果であった。これら地域を取得して後、パプスブルク王朝はその大部分がカトリック系貴族より成る封建階層をつく

り出した。斯くして自由農民たちを、とりわけ種族や宗教的背景を異にする自由農民たちを農奴に変えてしまったのである。その結果は社会不安をもたらし、この措置が農奴や恵まれないグループの間での民族意識の発達を大きく促進したのであった。ついにはオスマン国家と欧州史との関係を宛も象徴するかのようにはプスブルク王朝玉座の継承者フェルディナント大公は、長期にわたりオスマン側の要塞であり、かつ又バルカンに於ける重要な統治の中枢に当るボスニアのサラエヴォで（一九一四年六月二十八日に）暗殺され、それが第一次世界大戦発端の口火となった。欧州の政治・経済・文化及び社会の歴史とオスマン国家とのかゝり合いは周知の通りであるのでこの上更らに論議を重ねるまでもない。但しこの時期が欧州の外交政策の観点からは厳密に研究されているとはいへ、欧州、アジア、アフリカとオスマン国家との相互作用とか相互的な影響とかに関しては看過されて来ている。オスマン史に関するさらに徹底した研究は歴史的なさまざまな理由からばかりでなく、他の知的・学術的分野から眺めても正当な理由と根拠とがある。オスマン国家は歴史におよぼす社会心理とか或いは又歴史的な人口統計学とか経済的な立場での比較社会史についてさらに又社会・文化・政治の推移について、或いは全般的に近代化の動向について関心を持つ研究者たちにとって殆んど無限の機会を提供している。その上、行政管理目的のためにオスマン支配層が樹立した折衷的な文化や社会制度は、社会組織の比較研究に有益な例証を提供している。例えば各自の従事する職業に基き住民を社会階層に分類するやりかたは、中世の中東やバルカン諸地域での社会階層形成のパターンを研究する場合に一つの手掛りとして役立つものである。このようにして社会組織を適切に理解することは、宛もオスマン支配層が理解したように政府の基本的な機能を決定づけるため、即ち社会グループの中で調和を保ち、かつ又社会階層それぞれの分に依じて各個人に各種義務を割り宛てるために、今度はそれが重要な拠りどころを与える。

さらに又住民を遵奉する信仰に依じて、即ち、ギリシヤ正教徒、アルメニアン（グレゴリアン）教会派、ユダヤ教徒、さらにムスリムのミレット（「宗教自治体」）に編成した事実は、しばしば諸学者によって指摘されてはいるが、そうした

ことが人種意識の発現に、近現代に於ける国家形成の出現という事態にどのような役割を演じたか決定するには、なお一層詳細な研究を俟つ、もう一つの分野といえる。

オスマン行政組織面に於いて地方共同体〔村落・市街地域・種族〕はオスマン国家に於いて指導者集団の抬頭を理解する上で最も重要な、いま一つの論題である。まさしくオスマン国家に於ける地方共同体は、可成りの程度に自治と行政的自治権とを享受し、民衆文化や、さまざまな種族グループの民俗文化や慣習法の温存に役立ったのである。次ぎくく地方共同体の首長たちは、十九―二十世紀に於て民族主義者の諸運動に対して農民大衆の支持をとりつける上で極めて重要な役割を演じたのである。オスマン社会に対する理解は多くの社会慣習や諸制度の起原に光りを当てることになり、しかも現今バルカン及び中東諸国を支配する指導者たちの態度なり、そのもつ哲学なりを説明するための一助ともなる。それらの諸制度や志向態度に共通するオスマン的な背景は、地域的な、文化的な、又宗教的な差異や、又ばらばらまちまちの政治的忠誠心にも拘らず、現今まで持ち続ける或る種の基本的かつ永続的な近似性をバルカン、とりわけ中東社会に与えている。

まさしく国家管理下の土地制度、さらに攻略当時僅か七万の人口を持つ一都市からイスタンブルを人口数百万の大首都に仕立てかつ又アナトリアとバルカンとの間に連絡の紐帯をつくりあげた都市化のはなばなしい進展、さらに又あらゆる宗教信条の職人達を包括するギルド、さらには穀物生産を刺激したる農産物に対しての需要の増加、さらに又あらゆる人種グループに対し商品取引センターの勃興と新興商人階層の抬頭をゆるした甚だしく高度化された商品交換などはバルカン・中東諸族の上にオスマンの痕跡をとどめた諸制度や作用の若干のものと云えよう。そうした背後の力については殆んど研究がなされていないのである。

オスマン国家に於ける民族性や民族主義の抬頭についてはごく簡単に触れられてはいるものゝ更にもう一つの重要な研究課題といえる。ギリシア、セルビア、ブルガリア、アラブその他の民族主義に関する現存の諸研究なるものは、独

立と国家の地位を取得するための民族闘争といった、しばしばロマンティックな、しかも又ゆがめられて偏見にみちた記述となっている。斯くしてオスマン国家のなかで国家形成を条件付ける複雑なる社会的、経済的、文化的、政治的な理由を見失っている」……

と述べ、この点に関する詳細なる分析に就ては、別稿の *An Inquiry into the social foundations of Nationalism in the Ottoman State, Princeton 1973* に掲げる内容を一応参照されたいと附言する。カルパト教授は更に論述を続けて行く……

「抑々実際にオスマン国家に於ける民族主義の発達は、一に通商の拡大、二に商人階層及び知識層エリートの勃興、三に孤立的であった人種的、言語グループ内での漸増的な混乱がより大きな社会単位にまで拡大されていったこと、四に宗教共同体（ミレット）の変容が民族グループの範囲にまで及んだこと、五に西欧イデオロギーの影響が社会・文化・経済のからみ合う全分野にまで浸透したこと、等の諸関係から考察されるならば一層よりよく理解されるであろう。オスマン国家の中に存在するさまざまな人種グループの国家への移行が近代民族主義の最初期の形態のそれであることは扱て置き、それは独自の発展の歩みに従っての移行であり、しかもそれぞれが特殊のカテゴリーに属するものと云えるであろう。

かくしてオスマン国家に於ける民族主義に就ての正しい研究はムスリムとキリスト教徒——双方はむしろ異なる方向を辿ったとはいえ——の国家形成の比較分析と同様極めて重大な政治現象に対しての我々の理解の拡大に大いに役立つにちがいない。

オスマン社会の研究は、なお又宗教的共存と組織に関する重要な知見をもたらす。オスマン政府がムスリムとギリシア正教徒の双方に対して防護者となり、又後援者となったこと、しかも又偶然ではあるが、彼らの現在ある近代的な形態を条件づける上で極めて重要な役割を演じたことは紛れもない事実である。

スルタンのギリシア正教に対する関係とか、スルタンに対してのキリスト教徒従属民の諸義務、それと並んでギリシア正教高僧たちの手で作成された教義を実施に移すためオスマン政府が打ってきた実際上の手段などについて取上げるトラペズンティス (G. Trapezuntis) その他若干のギリシア正教司教たちの論文は、オスマン国家に於ける宗教と聖職者組織の研究の促進に役立つものである。さらに又、オスマン国家に於けるイスラムの制度的な、又イデオロギー的表示に関する研究とか、又西欧のイスラム研究者により長らく無視された宗教法や慣習法に基礎をおく二重司法制度の研究などは現在の独断的にして狭量なるイスラムに関する理解を大いに啓発してくれる筈だが……。

なお又オスマン国家に於ける宗教の研究との関連に於て、いま一つの興味ある研究課題が存在する。例えばムスリムと非ムスリムの民間俗信、或いは宗教々団、神秘主義神学者の友愛、異端の諸団体、さらに又オスマン支配下に於けるさまざまなグループの抱く社会的な不満とか、要望事項とか、精神的な欲求を表明するさまざまな宗教運動の如きがそれである。すべてそうした事柄は云うまでもないことだが、学術的探究にとって殆んど無尽蔵に近い研究課題を提供するものである。

として、この面での研究の進捗を期待する。次いで詩文学、造型美術、絵画面に転ずる。

(五)

最後になったが、オスマンの詩文学、音楽、造型美術、絵画、建築、都市計画、そのほか最高級に位する芸術作品については、その持つ本質的価値にも拘らず依然としてあまねく世界に知られていない。これらの諸分野の研究は人類の文化的・芸術的な宝庫を豊かにする上で意義深いものがある。しかもさまざまな文化と背景とを持つ諸国民間の相互理解のための新しい紐帯の発展を助長するものである。オスマンの歴史、文化、そして又その社会は研究者の興味と関心を惹くのに充分である。それというのもオスマン史が全人類の経験の一部を構成するからに外ならない。オスマン文明と

それが示すすべての事柄は世界史の流れの外に立つものではなく、その有機的な部分を示している。オスマン人は、さまざまな才能を持ち合わせ、又長所と短所、さらには成功と失敗とを持ち合わせていた。すべてこれらの事柄は必要に応じて批判されなければならない。とはいえ、批判するにせよ讚美するにせよ共に事実に基くものでなくてはならず、又これまでがそうであったのだが、トルコ、オスマンのすべてに就いて見境なしに非難したり或いは又讚美したりすることではなくむしろ客観的に到達した結論をこそ提示すべきである。

私はオスマン人に対し一方的に片寄った支持ではなく、たゞたゞ公正なる取扱いを訴えるものである。事実、筆者は、学術的な著述に於て求められている標準的な客観性と普遍妥当性がオスマン研究に於ても適用されるべきであることを求めているに過ぎない。知識の発達がこの段階まで来た以上、オスマン史を以って、単にイスラム対キリスト教間の長期にわたる抗争場裡に於けるいま一つの戦場のエピソードとしてのみ眺め続けることは不可能である。

オスマン国家は人々がその中で生活した経済的・社会的な秩序として又文化的・政治的な組織として理解されるべきで、他の組織の中で生活を営んだ人々が、恰もそうであったように歴史の同一諸法則に順応して発展をとげたのである」として世界史上、嘗つての古代のローマや、中世のノルマンにも比適すべきバイタリテイでダイナミックな大活動を展開したオスマンの世界史に於ける妥当な位置づけを明確に認識するよう呼び掛けている。

(六)

最後にカルパト教授はオスマン研究を一層発展させるために必要なる実際上の方策に就て触れる。

まず第一に、オスマン研究を中東、バルカン、さらにスラヴ研究課程のうちに組み込むことが要請される。第二に、世界史及び文明を取扱う概説書は、オスマン国家を他地域及び他民族の歴史と関連づけて妥当に取扱うべきであろう、あたかも通史ではあるがパイオニア的な著述ともいふべきポール・コールス（原文では H. A. Cole となっているが Paul,

H. Colls が正しい」がその著「欧州に於けるオスマンの衝撃」(The Ottoman Impact on Europe, 1968 London) に於て企てた如くにてである。〔訳者註—カルパトはコールスの対欧オスマン活動の取扱いに就ての視角設定に関して評価する〕

オスマン研究の発展のため必要な第三のステップは東欧、西亜、及び北阿に関する極めて貴重な知識を含む現存のオスマン文献資料を駆使することが研究者にとって可能となるようにトルコ語の教授に対し抜本的な改善がなされるべきである。

第四に比較的冷静、自由かつ公正に研究が遂行し得る場処に於てオスマン研究のみに専念できる研究機関が設けられることが要望される。最後にオスマン研究に従事するそれらの學術機関がより一層緊密なる協力体制を確立することが極めて緊急課題である。なお又東南欧のほか欧米各地に現存オリエンタリストの協会、プレ・オスマン、オスマン研究機関がオスマン研究のためにイニシヤティヴをとるべきであり、諸他の學術研究の分野から適切な研究の背景となるべき知識の提供を期待したい。

と述べて長文を結んでいる。

む す び

以上眺めて来た如く、本篇は現在アメリカで活躍中のカルパト教授の「オスマン研究」のうち専らオスマン国家と世界史との相互関連をテーマとしての縷述に就いて取り上げたものであるが、教授のオスマン史解釈に対しての根本認識、さらには世界的な研究体制の今後の在り方等々、オスマニストにとって研究活動上、重要な示唆と刺激を含むものだけに茲に取り上げて敢えて貴重な紙数を借用した次第である。(一九八〇・六月)